

るのに対し、佐藤氏は、ソ連軍におべっかして日本人を殺して、われ一人だけ生きのびようとするものの工作を粉碎するために生命がけて努力したのはあっぱれである。

彼は、腹膜炎の手術、更に痔病の手術で瀕死の患者となつて、若干早くといつても三か年間の抑留を解かれて興安丸で舞鶴港に上陸、復員局から軍服一着と一千円の支給をうけて故郷の花泉町についた。昭和二十三年十二月、母の健在、妻子は生きて引揚げておられたのに感激の涙を流した。

引揚げて既に四十五年は夢のように過ぎた。

その間二人の子はそれぞれ大学を卒え、不動産鑑定士、娘はハム会社の工房長、佐藤氏は無私欲で報恩感謝の念厚く長期にわたり町議会議員に当選し、現在は八十歳で若者を凌ぐ健康で議長に就任し一身に衆望を担い自治発展に努力している。

(出引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

## ラーゲリからの帰還

岩手県 竹田 正直

平成五年の夏、私は四十五年ぶりにシベリアの土を踏んだ。

岩手県遺族連合会(長野マサ会長)主催のシベリア慰霊巡拝団(菊池正団長・総勢五十二人)の一員としてである。

慰霊巡拝団は八月六日、アエロフロートのチャーター便で青森空港を離陸、かつて船で往復した日本海をあっという間に飛び越え、極東の都市ハバロフスクにたどり着いた。

あっけないほど、短い空の旅だった。

空港に着陸する前、眼下には懐かしいアムール河が竜のようにうねっているのが見えた。あの河を泣きながら、囚人のように歩いたことがまざまざと蘇ってきた。

ハバロフスクの街は、数少ない近代的な建物を取り除くと、昔と変わらない景色に映った。まるで、四十五年前にタイムスリップしたような感覚である。この街には、岩手県出身者八十人余りが眠っている。

豊かな日本と比較すると、お世辞にも設備が整っているとは言えないホテルに一泊した。いやがうえにもダモイ（帰国）を前に、帰りたくても帰れない夢に何度となくうなされた日々が思い出された。

今回の慰霊巡拝の旅は岩手県出身のシベリア抑留死亡者（確認された者）千二百十七人（抑留者は約八千人）のうち、実に半数以上が亡くなったチタ州（五百人余り）とイルクーツク州（七十人余り）を訪問地にしており、合わせて四か所を墓参した。

私が墓参団に参加したのは、妻が兄の墓参りをしたいと強く希望したからである。

旧ソ連当時から、私は機会があればシベリアを訪れたいと願ってはいたが、自分が収容された極東のムーリー地区（北樺太対岸地帯）やコムソモリスクへの立ち入りが許可されていないこともあって、二の足を踏

んでいた。

訪れたとしても、ただ辛い過去を思い出すだけではないのか、という感情があったことも否定できない。

今回の墓参でも、私と関係の深い場所といえ、ハバロフスクだけである。最初は気が重かったが、義兄の葬られた地域をたどるのは、妻と私自身の人生に対するひとつのくぎりであり、心の総決算という意味を込めて、参加することにしたのである。

義兄は中村恭二といい、大正十五年十一月七日、下閉伊軍岩泉街に生まれた。

県の「郷土将兵の調査結果」によれば、昭和二十一年二月二十五日、チタ州チタ地区ハタブラーク第十二収容所（死没者四百八十一人）で栄養失調のため病死したことになる。だが、ロシア側の発表によると、死亡したのは同じ年の二月九日と、半月もの開きがある。

この日付ひとつとっても、当時の状況がいかに日本人抑留者に冷たく、人の死も乱雑に扱われていたかがうかがえる。

埋葬地はチチンスク地方第二十四収容所第十二支部、埋葬地点はハタブラーク南方十二キロ付近のシルローワ、墓碑番号は189/8ということだった。

一行は、翌七日、ハバロフスクを発ち、千七百キロ西のチタ市にたどり着いた。チタ市は標高二千メートルを超え高原のまちである。ハバロフスクでは三十五度の酷暑のため、薄着で通した一行だったが、空港に降りるなり、冷風に凍えた。

チタにある第一墓地では、感極まり、ほぼ全員が慰霊祭の途中、亡くなった父や兄弟の顔がまぶたに浮かんで来てか、嗚咽した。全員で歌った「異国の丘」を口ずさんでいた私も、(抑留された場所とははるかに離れた場所に立っているながらも)当時のことがまざまざと思い出され、あふれる涙をこらえることができなかった。

この日は、赤十字関係者の尽力によって、あらたに三人の岩手出身者が眠っていることが確認された。墓参者たちの関係者ではなかったにせよ、私たちはどこか救われたような気持ちになった。

翌八日もチタ市内にある墓地一か所をまわった。第二墓地では、墓参団のメンバーで盛岡市在住の関村恭さん(七十歳)の夫(当時三十歳)の墓が確認され、一行は自分たちのことのように喜びあった。

私はさいわい、生きて故国の土を踏んだが、それがかなえられず、無念の思いのまま異国の土となった抑留者たち。自分も同じ運命をたどりながら、たまたま九死に一生を得ただけなのだ。改めてそのようなことを思い知らされ、唇をかみしめた。

義兄の埋葬地は、今回の墓参コースからは外れていました。

「せっかくここまで来ているのに、できるなら、クルマでもチャーターして行きたいものだ」

そのような思いにかられたが、それまで見てまわった墓地が、本当に本人の骨が埋められているか確認しようもない事実を冷静に受けとめた。そして、目の前に並ぶ箱型の墓地に慰霊の気持ちを捧げること、これまで抱いてきた戦友や義兄への思いを代弁させようと考え直した。

午後、もう二度とはこれない義兄の眠る大地を眺めながら、チタをあとにした。そして、バイカル湖で世界的に有名なイルクーツク市へと向かった。

シベリアの日本人墓地は、トド松林の中に、あるいは広漠とした草原の一角に、現地人の一般墓地のかたわらにあった。

チタでもイルクーツクでも、抑留者が帰国し終えた昭和三十四年ころから、旧ソ連の囚人の手によって日本人墓地がつくられたという。どの墓も白いセメントのワクで囲まれた、ほぼ日本人の背丈ほどの大きさで、無造作につくられたという印象は拭いきれない。

厚生省の資料では、終戦後にソ連領内に抑留されたうえ強制労働によって死亡した人は約五万五千人、このうち身元が特定されたのは約二万二千三百人に過ぎないという。

私はほかの墓参者がそうであるように、持参した郷里の水や（私を含めどの抑留者も夢にまで見た）白米の御飯、お菓子、日本酒、煙草といった嗜好品を共同墓地に手向け、静かに瞑目した。

銃声が二発、明け方のラーゲリに響いた。

「珍しいな。暴発でもしたのかな」

昭和二十二年（一九四七）の晩夏、ダモイが始まったことを「日本新聞」で知っていた私たちは、脱走などはありえないと思っていただけに、その銃声はまちがって暴発したか、せいぜい威嚇射撃でもしたにちがいないと思いついでいた。

表に出ると、鉄条網で三重に張り巡らされた柵の中で、一人の日本人がうつぶせになっていた。

「まさか。そんな馬鹿な」

男は内側の鉄条網をくぐったところで射殺されたらしかった。

「殺されたのは鈴江という兵隊だそうだ」

その知らせを聞いた私は、頭から血の気がひく思いだった。数少ない戦友の名前だったからだ。彼は静岡出身の好青年だった。

鈴江とは、初年兵時代を同じ南滿州の公主嶺で過ごし、戦闘の最中に離散した。そして、抑留されたムーリー地区の108ラーゲリで奇しくも再会したのだっ

た。

医務室に運ばれた鈴江の瘦せた胸は、二発の弾丸によって撃ち抜かれていた。

私は戦友を奪われた憎しみを抱き、改めて理不尽な抑留に悲憤するとともに、無謀な行動をとった彼の心情を思つて涙した。

抑留当初は別にして、帰国できると決まったあとは、ソ連側との意志疎通もできており、脱走など企てる者はいなかった。

たとえ、うまく収容所を逃げ出したところで、狼の餌食になるか追っ手につかまえられることは目に見えていたし、広大なシベリアの大地をどう歩いたところで、死に場所を求めているようなものだったからだ。

鈴江にしても、そんなことは百も承知だったにちがいない。おそらく自分でも無意識のうちに不可解な行動をとつて、はっと我にかえったときは胸が燃えるように熱く、そして故郷で待つ家族の顔を思い出して、死に絶えたのであろう。

「せつかく、これまで苦勞してきたんだ。なんで我

慢できなかったんだ」

そう喚いたところで、死者は生き返るわけではない。私自身、心の整理をするように、それまでの抑留生活を思い描いていた。

十九歳の初年兵だった私は、終戦から半月以上も経た九月二日、関東軍の一兵士として東滿州でソ連の軍門に下り、屈辱的な武装解除に統いて、俘虜として自由を束縛された。

まさか、その日を境に、(戦闘もないのに)数えきれない同胞の死を見届ける悪夢の生活が始まろうなどとは夢想だにしていなかった。

武装解除からラーゲリへの行進の途中、日本軍の陣地で多数の死体が散乱し、悪臭を放っていた。一方的に日ソ中立条約を破棄(八月八日)して侵攻してきたソ連軍の戦車隊に果敢に突撃し、壮絶な最期を遂げた将兵の無残な姿だった。

ソ連側は「トウキョー・ダモイ」という甘い騙し文句で日本人を欺き、シベリア鉄道で領土内の隅々まで日本人を移送した。

私たちは、マンドリン銃で威嚇するカンボイ（警戒兵）の略奪に遭いながら、沿海州ムーリー地区の北緯五十二度線上の奥地、106收容所へと送られた。

初めて体験するシベリアの冬は、予想していたとはいえ、凄まじいの一言に尽きた。

想像を絶する酷寒での重労働。粗雑な丸太づくりの建物でのランブ暮らし、ベッドとは名ばかりの蚕棚のような不衛生きわまる寝床、シラミとナンキンムシの襲来、三百グラム程度の黒パンと缶詰の空き缶に六、七分目しか注がれない具のないスープ……。どれをとっても二度と思ひ出したくないようなどん底の生活だった。

最初の強制労働は、ピラ（のこぎり）とタポール（斧）を使った森林の伐採作業だった。作業では敵しいノルマが課せられ、達成できない場合には、連帯責任として食料の配給が減らされた。

作業を終える点呼も、私たちの不満といらだたしさを募らせた。途中まで数えて、数を忘れてしまい、また一から数えて、それを何度もくりかえすおそまつさ。

立っているだけで精一杯の疲れきった体を支えるのがやっとだった。

支給されたシェーバ（防寒外套）やカルトーンキ（防寒長靴）も零下三十度という屋外作業に従事する私たちの生命を保証するような代物ではなかった。あかぎれはあたり前、凍傷の悪化から指や耳、鼻を失うものも多かった。

慢性的な栄養失調と過労、病気、何より絶望的な状況の中で精神が病み疲れ、毎日のように同胞が命を落としていった。

入所した段階で一千人を数えていた抑留者は、私が108收容所に移される時点では、すでに半数を割っていた。

明け方などにラーゲリの中で冷たくなっていた者、病院に送られたまま帰ってこなかった者、作業中の事故で死んだ者、夢遊病者のように作業現場や收容所の建物から離れ、威嚇射撃にも反応せず、みすみす射殺された者、自殺した者……

死のかたちはさまざまだったが、終戦間近になって

根こそぎ動員された年配の兵士や、若くても体力の弱い者から、まるで伝染病にでもかかったように、次から次へと倒れていった事実を見逃すことはできない。

医務室に隣接した死体置き場がいっぱいになり、凍土にスコップを突き刺しての墓穴づくりが、幾度となくくりひろげられた。

だが、シベリアの冬の大地は頑として言うことをきかない。いくらスコップや鉄の棒で力いっぱい突き刺したところで、跳ね返され、土などは現れない。

ようやく骸（むくろ）を並べるほどに掘ったところで、あるときは数人、あるときは十数人重ねて葬った。しかも丸裸で。生き残っている者たちの顔も青白く、黄泉の世界からやってきた死神たちがたむろしているような作業現場だった。

春になると、凍っていた表土が埃となつて舞い上がった。そうすると、あちこちに腐乱しかかった死体が浮かんできて、その無念さと怨恨を漂わせていた。

改めて、土を掘り返し埋めるのだが、もう誰がどこに葬られているのかわからない。

私たちのような状況は、シベリアの全土あるいは中央アジアでも見られたはずである。

墓参団に参加した私の頭には、そのような凄惨な記憶があった。たとえ、戦後になって、ソ連の囚人によって日本人墓地がつけられたとはいえ、どこまで正確なのか、いや、名前がわかっていて、埋葬地が判明しているのは、本当に運のいいことがわかりすぎるほどわかっていたのである。

最初の冬を過ごしたムーリー地区に日本人墓地があるとは思われないし、仮につくられたとしても、その場所も埋葬された人物も定かではないのである。

生と死が同居しているラーゲリは、屠殺を待つ家畜小屋のようなものだった。

「次は自分の番だ」という恐怖や絶望と背中合わせに、その日を生き延びていた私たちは、人権を完全に無視された奴隷そのものだった。そして、私はムーリーで強制労働をしていたとき呼び出され、あやうく鉄道建設工事の要員として、チタカイルクーツク方面にまわされることになった。

さいわい、何かの手違いで途中から舞い戻ってきたが、そのとき、何も知らない私は、「ここさえ出られれば、どこでもいい」という心境だったのである。

人間の運命とは、わからないものである。本当にあのとき、バム鉄道の建設現場にまわされていたら、私の妻とも出会うことなく、妻の兄たちとともにチタの大地に眠っていたかもしれない。

ほんの偶然のいたずら、紙一重のところ、私は生き延びることができたのである。

抑留二年目、つまり昭和二十一年四月から翌二十二年の正月までは、最初のラーゲリより北に位置していた108ラーゲリに配属させられた。

同ラーゲリには木工所があり、私はそこで働かされることになった。室内勤務とあってそれまでの地獄のような伐採作業からは解放されたものの、劣悪な状況での強制労働という構図には変化がなかった。

そして、前に記したように、ここでは鈴江という戦友の死に立ち会ったのである。

ドイツやポーランドといった西からの捕虜、さらに

はロシア人の囚人たちと一緒に作業をしたのも、この木工所が初めてだった。

慣れない工作機械の操作に失敗して腕をなくすような大怪我をした者もいれば、医務室の廊下で見た死体があとで聞くとベルリンオリンピックに出場した有名な選手だったりした。

また、初期のラーゲリでは、戦争が終わったにもかかわらず、戦中同様に将校や下士官が下の階級の者をいいようにこき使う旧軍隊そのままの仕打ちがまかり通っていた。

食料を取り上げたり、仕事もしないでぶらぶらしているにもかかわらず、気に食わない奴を殴ったりする、特権をふりまわすかつての上官の横暴には、ほとほと困惑していた。

ただでさえ、ソ連側の野蛮で非人道的な行為で弱っていた同胞は、旧日本軍の旧態依然とした体質のために死を早めることになったのである。さすがに、内部からも批判の声があがり、ついには逆に上官を袋叩きにしたケースも出るに及んで、将校や下士官は別棟に

移されることになった。

ダモイ（昭和二十三年九月）までの期間を過ごしたコムソモリスク郊外の第十四ラーゲリは、それまでの奥地と違って別天地の感があった。

都市部にあったラーゲリは、総じて待遇が良かったと聞いている。

私は夏の慰安会で劇の主役を演じたり、最年少の作業大隊幹部としてラーゲリ内の待遇改善やダモイの早期実現に尽くした。

もっとも、その間にも、私はハバロフスクにあったラーゲリを垣間見たことがあり、コムソモリスク以上の恵まれた境遇に驚いたものだった。

ハバロフスクの前を流れるアムール河は、冬ともなれば完全に凍りつき、陸続きとなる。厳冬には線路が敷かれ、蒸気機関車が走った。ところが、私は数キロにもわたる川幅のアムール河を何の因果か、歩いて、しかも二度も往復したことがある。

夏には船が航行し、厳冬期には汽車が走るのだが、春先と初冬の氷が薄い時期には線路が外され、歩くし

かなかったのである。

今回の墓参で、ハバロフスクに着いた私は、そのことを思い出し、胸が苦しくなった。

コムソモリスクやハバロフスクの戦後復興の縁の下の力もちとして、日本人抑留者の果たした功績は大きい。

私たちが汗を流して建築した建物の多くが、今なお現役として利用されているのである。そのことをもう少し、知られてもいいと思う。

どんなに美辞麗句を並べても、ひとひらの花びらの美しさを表現するのは難しい。同じように、シベリアでの抑留体験の真実を伝えるのに、どんなに重い言葉を連ねても、その辛さ、痛み、苦しみを再現させることは難しい。だが、激動の昭和を語る世代が少なくなり、戦争体験が風化してゆくと思うと、いたたまれない気分になる。

シベリア抑留問題は、ようやくスポットがあてられたというのが実態であろう。旧ソ連が解体した今、改めてシベリア抑留とは何だったのか、それを考える時

期がきたことを痛感している。

やはり、日本はいい。

シベリア墓参から帰った私は、抑留生活から解放されて帰国したときと似たような思いを抱いた。

シベリアは半世紀前とほとんど変わっていない。それが私の率直な印象でもあった。戦後の世界を二分しかつての大国ソ連のイメージはどこにもなく、庶民は相変わらず質素な生活に甘んじていた。

抑留されていた当時、珠玉のように思えた黒パンも豊かな日本食に慣らされた口には、正直言ってみないものではなかった。

複雑な心境だった。あれほど欲しかった黒パンが、いざ食べようとしてもなかなか口に入らない。それが悔しくもあり、また、同時に時の流れとして受けとめなくてはならないもののひとつも思った。

けっして、うまいとは思われない黒パンだったが、それは苦い記憶を味わうために必要なものであった。

あるいは、黒パンは青春の苦味が詰まったものであり、無意識に食べることに抵抗を感じ、拒絶反応が出てい

たのかもしれない。

シベリアに暮らす人々からも、戦後すぐに日本人が多数運ばれ、強制労働の末、息絶えたという歴史的事実が忘れ去られているという。日本と同じように、戦争を知らない世代の台頭によって、過去が過去の上に重なり、堆積しているのである。

私が故国の土を踏んだのは、昭和二十三年十月のことだった。

私の故郷は、石川啄木と同じ岩手県岩手郡洺民村（現・玉山村洺民）である。

洺民の武道にあった私の生家は、かつて啄木一家が二回にわたって寄寓した米田家の向かいにあった。啄木の母は、米や味噌、醤油などを借りに訪れており、北海道に立ち去る前、お礼として台所用品などを置いていったという。私が子供のころには、蔵の中にそのような遺品がまだ残っていた。

汽車の窓からふるさとの山が見えてきたときには、本当に涙で景色が曇るほど感動したものである。それは啄木の詠んだ歌と符号する感情の高ぶりであった。

汽車の窓 はるかに北にふるさとの 山見え来れば  
襟を正すも

そして、そのときは、生きて帰ってこれたことに感謝するだけで胸がいっぱいであり、家族と再会できたことに感無量であった。

だが、やはり生活が待っていた。仕事もしなくてはならない。

舞鶴で渡された帰省費は、受け取ったときこそ「大金」と思ったものの、すぐに当時の物価と比較して微々たるものであることを知っていた。むろん、シベリアで働いた手当などは一銭も渡されていなかった。戦後の混乱のなかでは、ソ連はもとより、日本の政府も私たちのような引揚者を保証してくれるはずがないことはわかっていた。

慢性的な栄養失調に悩まされながら、ただ働きしてきた私は、ゆっくり、のんびりしなかったが、家族の多い旧家ではそれは許されなかった。

一家の稼ぎ手だった父親は、私がシベリアにいる間に病死していた（不思議なことに、私は父が亡くなっ

た同じ日、ラーゲリで父の幻影を見ていた。帰省して自宅の仏壇で位牌を手にとって亡くなった日付を知ったとき、私は男泣きに泣いたものである。

家には腹を空かした子供たちがいて、ちょうど私たちがラーゲリの監視人に向けていた物欲しげな目私に向けていたのである。

私の実家は、その地方では由緒ある旧家であり、地主のような立場にあった。ところが戦後は農地改革などによって土地を失ったこともあって、没落同様であった。

出征する前、私は盛岡工業学校の生徒で、土木を専攻していた。（昭和十八年十二月、戦時繰り上げで卒業したのち、翌十九年一月、関東軍経理部の軍属として満州に渡り、新京、牡丹江の勤務を経て、二十年五月、南満州の公主嶺に入隊した。そして、ソ連国境で陣地構築に携わっていたとき、ソ連軍と交戦し、終戦も知らないままに戦い続けたうえ、抑留されたのである。）

「土木関係の仕事があれば」

そう思っていた矢先、さいわい、人材を募っていた  
県庁の職員として採用された。

採用されたものの、当然ながら、私より若い人たちが  
上司になっていった。後輩に頭を下げながら、仕事を  
するのは、(上官に殴られながら、さらにはソ連人に  
銃で脅されながら暮らした生活と比べれば)何とも思  
わなかったが、ときには「戦争に行った者が馬鹿を見  
る社会では駄目だ」と、心の中でおこったことがあっ  
た。

引揚者の多くは、戦後の復興期の中で、多かれ少な  
かれ、そのようなジレンマを抱きながら働いたのは事  
実である。

「いったい、あいつらは何のために死んだんだろ  
う」

目覚ましい発展を遂げてゆく日本の姿を眺めている  
と、戦争体験者として異国の地に倒れた同胞を思い、  
辛くなった。

「これが、あいつらの希望していた社会だろうか」  
そのように自問自答したり、疑念を抱くこともあっ

た。

だが、私は県庁で働けるというだけで、十分に幸せ  
であった。無我夢中で働いていると、生きている実感  
がわく。最初の十年間は、ほとんど仕事に追われてい  
るうちに、またたくまに過ぎてしまった。

引揚者のなかには、仕事にもありつけず、せっかく  
帰ってきた故郷を去って上京した者もいれば、シベリ  
アで酷使されて病気がちになったり、障害を抱えて、  
職に就けない人たちも大勢いた。また、引揚げてきた  
まではよかったが、家族はそこにいなく消息もわから  
ないという者もいた。

私は恵まれた方だった。

### 【執筆者の横顔】

竹田氏は、盛岡工業学校の土木科を卒業した。昭和  
十九年一月、関東軍司令部の軍属採用試験に合格した  
ので渡満し、経理を担当して勤務に精励していた。と  
ころが昭和二十年五月、召集をうけ、公主嶺の部隊に  
入隊し軍事訓練をうけた。更に東満地区に勤務してい

るうち八月十五日にソ連軍の捕虜となった。

我々はソ連軍と一回も交戦していないのに捕虜とすることは違法だ。などと言ってもソ連軍は馬耳東風、日本兵をウラジオストックから日本へ帰還させると言っていたが、それらはみならずであった。どんどんシベリア鉄道で奥地へと連行させられて、直ちに強制労働の伐採作業、酷寒零下三十度のなか、逮捕以来食事らしいものも食べていないので栄養失調、病氣などなどで死者続出。人間の運命はわからない。竹田氏が鉄道建設の強制労働にまわされていたら、竹田氏の今日は無かった。鉄道建設に強制労働に服した日本兵は全員凍死したからである。戦後すぐシベリアに運ばれ強制労働させられて息絶えて死んで逝った多くの若い日本兵の、この歴史の真実が忘れ去られようとしている現在である。竹田氏は、シベリア抑留体験の真実を伝えようと思ってもどんな重い言葉を運ねても、そのつらさ、その痛み、その苦しみを再現してみせることはできないと語るのである。竹田氏の真剣な眼差しは涙で光っている。

竹田氏は慢性的な栄養失調で立ち治らないと言われて、生きて日本に帰ることはあきらめていた夜中に、竹田氏の枕もとに故郷の父が立ったのを見た。竹田氏は感無量であった。竹田氏は虚弱者の取り扱いをうけ、みんなより一足早く、三年目に日本へ帰還を命ぜられた。列車が故郷の駅に着くころ、窓から故郷の山を見つけた。そのとたん、「汽車の窓、はるかに北のふるさとの・山見え来れば 襟を正すも」と生きて帰った感激はきわめて深くただただ泣けて涙がとまらなかった。

父は病死していた。仏壇の位牌に書いてある命日の月日は、竹田氏がシベリアで死ぬ生きるの病床の枕もとに立った父をみた月日と偶然にも同じ日であった。竹田氏は又しても男泣きに泣いた。父は地主だった。土地改革にあつて没落していた。

竹田氏は県庁を訪ねて折衝し、県職に採用となり土木勤務となった。その後、土木部参事兼港湾課長に就任し、その外、県建設技術協会事務局長、全日本建設技術協会理事を歴任した。現在なお国際興業盛岡支店長として業界の顔として幅広く活躍している。

## 戦争を越え、一世紀を超えて

福島県 藁谷 はるの

私は明治二十六年三月二十七日宮城県志波姫町 土族大川清藏母アキノの四女として生まれ今年(平成五年)満百歳となりました。家族は祖父敬藏(八十九歳死亡)がおりましたが祖母は早死にしておりますでした。

祖父は厳格な人で私は子供なのに女大学というものを教えられました。子供で何もわからなかった。よくかわいがってもらったことを覚えています。

父はまじめな人で、町の神社総代や水田水管理総代を永年勤めており、母は永年名誉村長を勤める名家鈴木家の生まれで嫁に来る時下女を連れてきたとのことです。

母も厳しい人でした。私は兄弟姉妹のうち、一番小柄で身体も弱かったので小学校に入学したころ、毎日、母がおんぶして連れていってくれました。

みんなに赤ちゃんだと笑われるので友達と一緒に登校するように母が気を配ってくれたようです。

町は付近に伊豆沼、長沼があり、白鳥の飛来地として有名であり広い面積の自作農でしたので子供の時から、手伝いをさせられました。明治三十七、八年、日露戦争に長兄萬藏が二百三高地の激戦で戦死したので、奉天大会戦で戦功をたて、凱旋して来た清五郎を姉キヨノの婿に迎え大川家を継ぎました。

明治三十八年は東北地方は大凶作で南京米やロシア黒パンなどを配給されましたが、私の家では、祖父の代に救荒用にと火棚の梁の上に俵に入れて貯えておいた八石(ハトムギ)を粉にして食べさせられましたが、とてもおいしいと思いました。

私は水田作業をしてもみんなより遅く、いつも後になるし、ヒルに吸い付かれたり、腰をかがめての田の草取りは、太陽に頭を照りつけられると、目まいがす